Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

既製テスト問題の利用を考える

根岸雅史　Negishi Masashi
（東京外国語大学）

1．既製テスト問題の利用と著作権問題

定期試験の検討会に招かれることがあるが，その際に，教師自身の手によらない既製テスト問題が含まれていることがある。それは，文法のテストであったり，リーディングやリスニングのテストであったりする。本稿では，こうした他者の手によって作成されたテスト問題の定期試験での利用について考えてみたい。

リーディングやリスニングのテストでは，テキストだけを借りてきている場合と，それらに伴う設問も一緒に借りてきている場合とがあるが，後者の場合はまるまる借用していることになる。リスニングなどは，ときに，選択肢が絵で提示されているが，それらが切り貼りしたような形で貼り付いているので痛々しい。また，リスニングの音声素材も編集されていないので，CD の該当箇所だけを流して教室を回るという話も聞いたことがある。

では，既製テスト問題は，そもそもどこから取られているのだろうか。その出典は主に３つであろう。ひとつは入試，もうひとつは英検などの外部試験，そして問題集だ。これらの問題を著作権者の承諾なしに利用した場合，その利用方法如何によっては著作権法違反となる場合もあるので注意が必要だ。また，利用可能なものであっても，出典を明記することが望ましいと思われるが，テスト自体に明記できない場合，模範解答などに示すのでもいいだろう。以下では，著作権の問題をクリアしているという前提で，既製テスト問題の利用について考察する。

2．既製テスト問題を定期試験に利用する場合の問題点

入試や, 英検などの外部試験は, 定期試験とはまったく異なる目的を持っている。入試は受験者の英語力の弁別を主たる目的としており，英語力がきれいに弁別されればよい。また，英検などの外部試験はそれぞれのテストの目的があり，それらの多くはある基準への達成度を見ようとしている。いずれにしても，特定の言語知識や技能を集中的に見ようとするのではなく，基本的に，様々な言語知識や技能を幅広くサンプリングしようとしている。また，能力の弁別に主眼が置かれているので，様々な言語知識や技能が複合的に問われていても問題はない。

これに対して，定期試験の目的は，指導や学習の成否を見ることである。基本的に，定期試験ではそれぞれの評価規準に対応した問題が出題されることになっている。そこに複合的な問題を出していると，その結果をどの評価規準として扱うかに問題が生じてしまう。

既製テスト問題をテストの項目ごとに利用する場合でも，テスティング・ポイントにずれが生じていないか確認する必要がある。また，一見テスティング・ポイントが合っているように見えても，その問題に含まれるその他の部分の単語や文法といった要素にも注意が必要である。それらの知識の欠如が，定期試験の実施対象の生徒の問題の正解を妨げてしまう可能性がある。例えば，次のような入試問題があったとしよう。

> 下の文の（　　）の中に入れるのにもっとも適するものを，あとの１～４の中から一つ選び，その番号を書きなさい。
> This robot（　　）for cooking in the future.
> 1. uses　2. is used　3. is using　4. will be used

この問題は，動詞の「時」に関する知識を問うているように思われる。しかし，もし“in the future”という表現が未習であれば，２を正解だと思ってもおかしくないだろう。

入試の過去問などを集めて，文法のカテゴリーごとに分類している問題集があるが，これらの利用も注意が必要である。上述のように，入試問題の作成に当たっては，問題作成者の最大の関心事は，そのテスト問題で受験者の能力を弁別することである。そのため，テスティング・ポイントが複合的であることもあり，それらを１つの文法のカテゴリーに分類することは難しい。それにもかかわらず，問題集では後付けで特定の文法のカテゴリーに分類されるため，当該の文法の知識以外の要素の知識がなければ解けないこともある。

3．受容技能の既製テストの問題点

では，受容技能の既製テストを用いる場合はどうだろうか。受容技能のテストは，テキストとそれに関わる設問から成る。

まず，リーディングでもリスニングでも，そのテキストが，授業で読んだり聞いたりしたものとどのような関連性があるかを確認しなければならない。テキストの特徴としては, テキスト･タイプやトピック，メディアなどがあるが，どの観点の類似性を追求するのかということになる。たとえば，授業で物語文を読んだのであれば，テストも物語文にすべきだし，授業でアナウンスを聞いたのであれば，テストにもアナウンスを用いるべきであろう。

トピックの類似性は，もう少しやっかいかもしれない。例えば，教科書のトピックが何かのスポーツだとすると，テストのトピックをスポーツというカテゴリーで揃えるのか，教科書で扱った特定の競技で揃えるのか，選手のレベルまで揃えるのかなど悩ましいところだ。類似性が高ければ高いほどよさそうであるが，教科書のテキストとの内容のかぶりが出てしまい，本当の意味での理解を問えないということもある。

考えなければならないのは，テキスト・タイプやトピックのことだけではない。当然，言語レベルも考慮する必要がある。特に入試問題は，３年間の学習を終えたという前提で作られているので，未習の語彙や文法が入っていないか確認する必要がある。未習の語や表現があった場合は，注をつけるなどして対処することになるだろうが，あまりたくさんの注をつけるのは考えものである。そのような場合は，テキストそのものの使用を見直した方がいい。

相応しいテキスト・タイプやトピック，言語レベルのテキストが見つかったとして，次に考えなければならないのは設問である。この設問は，どのような読み方や聞き方を求めるかに関わるものである。まず，テキストに元々ついていた設問をそのまま用いる場合であるが，それが指導目標の読み方や聞き方に合っているかの確認が必要である。一方，テキストに元々ついていた設問とは別のオリジナルの設問をつける場合は，そのテキストのどこを問えるかを考えて設問を作るのではなく，基本的には授業で用いたものと同様のリーディング・タスクやリスニング・タスクを用いるとよいだろう。もちろん，授業でのタスクとテスト･タスクは, 様々な要件によって多少異なることはあるだろうが，原則として，同じスキルを問わなければ，授業計画で設定した評価規準と異なってしまう。

4．既製テストの波及効果

既製テストの生徒への波及効果はどのようなものであろうか。生徒にとってみれば，授業でやった問題やテキストがそのまま出るわけではないので，このような既製テストがどのような波及効果を及ぼしているのかをモニターすることは重要である。

既製テストが単なる実力テストであると思われているとしたら，それは問題である。実質，実力テストになっている場合はもちろん, 生徒の認識として，実力テストと捉えられている場合も問題である。

単なる実力テストと思われないためには，何らかの観点で，授業とテストがつながっていなければならない。また，こうしたつながりを生徒に説明しておくことも重要であろう。そうすることで，定期試験に向けて, 生徒はテストのねらいを正しく認識し，勉強に励むことができる。